

1、 少年期を取り戻す

小学校において、見た目の行儀良さ、クラスの落ち着きが最も管理職から評価されるものとなっている。近隣の小学校では、若い教師に対して「きちっとさせなあかん」「もっと厳しくせなあかん」と校長が指導しているという話も耳にする。困難さを抱えた子どもたちをおさえこもうとする指導が横行している。

子どもたちは、学校ではきちっとすることを要求され、学校外では、塾やスポーツ少年団に身を預ける。きちっとできない者は、排除されていく。遊びの世界の経験が乏しく、交わる力が育ちきらない。管理抑圧的な指導のもと、豊かな少年期を生きられない子どもたちに、少年期を取り戻すことこそが、実践の大きな課題であることを痛感している。

2、 小学校実践の重要性

中川実践に登場するタツヤは、「あんな子はこれまで見たことがない」と言われるほど、大きな課題を抱えた子である。そんなタツヤに対して、中川氏は、「絶対に見捨てない」という信念のもと、彼に寄り添い続けている。タツヤ自身を分析し、父親ともつながっていく。タツヤにとって安心できる存在に中川氏がなっているからこそ、彼は小学校時と比べ、落ち着いた生活を送れているのである。

考えなければならぬのは、タツヤをここまで困難な状況に追い込んでしまったのは、小学校であるということではないだろうか。小学校における管理的な指導が、発達障害の診断を受けている彼の状況を、さらに厳しいものにしてしまったのである。

福田氏は、近畿の基調の中で、「2000年代後半に高木氏が展開した隆信を自立へと誘う実践は、今や小学校実践の課題として引き受けるべき事態となっているのである」と指摘している。

いま、我々小学校教師が、そのことを自覚し、どんな子どもも排除しない実践を展開し、子どもたちとともに豊かな少年期社会をつくりあげていくことが非常に重要になってきているのではないだろうか。

3、 ドキドキしながら聞く

自分の未熟な実践が基調に取り上げられた。合宿研でも厳しい分析をしていただいたが、この基調を読み、改めて自分の力不足を痛感した。

実践のテーマは「豊かな少年期」。子どもたちが自らの手で楽しい世界をつくりあげていけるようにしたいと思い続けた2年間だった。学級内クラブは大いに盛り上がりを見せ、学校の時間内に収まらず、放課後に魚を採りにいくこともあった。また、信頼感を確かめ合うのはスキンシップを念頭に、体育の時間に、さまざまな鬼ごっこやSケンなどを行った。彼らは卒業の直前まで男女関係なくからだをぶつけあって遊んでいた。

ご指摘にある通り、彼らの次なるステージを、自分の中で描けていなかった。自分自身が楽しさの中に浸っていた。

合奏発表会に向けた練習で、美玖にドキドキしながら聞いた場面。今一步踏み込んだ指導ができなかった。美玖との思想的対話をしなければならなかった。

豊かな少年期世界をつくりあげると同時に、次のステージを見越した指導を展開していかなければならないのである。

4、 腹をくくって実践する

基調の最後は「腹をくくって実践することが今の私たちには求められている」で、締めくくられている。

今一步美玖に迫れなかった自分。腹をくくれていなかったからだろう。

腹をくくって実践するには、相当な覚悟が必要だ。時間も、労力も相当なものになるだろう。だが、枠をつくらせない、狭められた枠を広げるために、そして、狭められた枠の中にいられずに学校の外で生きるKに本気でかかわっていくには、腹をくくって実践していくしかない。

子どもたちは子どもたちの中でこそ子どもになれる。小学校実践の重要性を今一度自覚し、腹をくくって子どもたちに寄り添い続ける。